

今年の森松展、 その先にあるもの

社長
インタビュー
special

— 社長に聞く、タイトルに込めた想いとこれからのつながり

今年も、皆さまをお迎えして、森松展を開催します。

普段なかなか見ることのできない商品や情報に触れたり、直接お話をしたりと、毎年たくさんの発見や交流が生まれる森松展。私たちにとっても、これからの仕事や新しい可能性につながる大切な機会です。

今回は、今年の森松展に込めた思いや、仕入れ先・取引先の皆さまとのつながりについて、社長に聞きました。

つながりが、
未来をつくる。

インタビュー

1 今年の展示会のタイトルに込められた思いを教えてください。

社長：「Life With Plastics」～かたちを変えて、支えている～ 言わばプラスチックとともにある生活、です。
現代においてプラスチックの存在は欠かせないもの、普遍的なものではありますが、軟質樹脂の持つしなやかさや、硬質樹脂の持つ多種多様な加工性の良さ、改めてそれを見つめ直し、より良い生活へと繋いでいければと願っております。

2 皆さまに、今回の展示会を通してどんなことを感じていただきたいですか？

社長：「プラスチックという素材の持つ可能性、そして来場者の方々の生活においてのプラスチックの持つ存在感を再認識して頂きたいです。」

3 社長から見て、今回の森松展をきっかけに、今後どのようなつながりや展開が生まれることを期待していますか？

社長：「これは今回に限らずですが、以前よりお取引させていただいている取引先様と、今回初めて弊社へ来場頂いたお客様との新しいつながりが生まれること、またそれらがいくつも発生することでより弊社を中心とした輪が広がっていくことを期待しております。」

最後にひとこと

「皆さまのお陰で、森松展もはや34回を重ねることが出来ました。これからも得意先様・仕入先様のみならず、地域の皆様にもご支持頂ける展示会となるべく精進してまいります。今後の森松にもご期待ください！」

心地よい状態に留まらない

森 直樹（代表取締役社長）

10月を目前に控え、展示会準備も大詰めとなってまいりました。第34回元気が出る森松展、重ねて皆さまのご来場をお待ちしております。また、展示会直後の17日、18日には、例年参加しております「名古屋まつり」のエンゼル広場会場にて甲冑試着体験ブースを出展、31日には「みなみメーカーズキャンプ」のアピタ名古屋南店にてビニールクラフトのブースを出展と、外部でのイベント参加が重なる月となります。地域の皆さまとの交流を通じて、何か貢献できることがあればと思います。さて、今年も残り3ヶ月となり、まだまだ暑さを感じる日が多いものの、着実に年末へ向かっていきます。自分自身、一年のサイクルが固まってはいますが、日々は目まぐるしく過ぎていきます。自分の毎日をより良くしていくには、自分の1日、1ヶ月、1年を振り返り、そしてその先を計画していく。いわゆるPDCA（Plan：計画、Do：実行、Check：振り返り、Action：改善）を回すことが、より良いサイクルをつくる元となります。では、なぜ毎年の同じサイクルや、毎日の行動を改善することが難しいのか。その理由の一つとして、我々には「現状維持バイアス」という心理的な傾向があります。不合理だと分かっている、これまで続けてきたことを続けることで安心感が得られるというものです。つまり、心地よい状態＝停滞とも言えます。多少心地が良くないことであっても、いつも自分が取らない選択を試してみる。つまり、変化を起こすことで、そこからまた新たな習慣が生まれていくのではないのでしょうか。そう考えると、会社で何か新たな試みをするとなれば、前向きな反応もあれば、そうでない反応も起こります。変えたくないという思いは当然のものとして受け止めながらも、今一度、変えることの良し悪しを判断し、まずはやってみることができる組織でありたいものです。



デザインマンホール3

森松産業（製造部）M・Nさん



夏季休暇中、友達の趣味である「デザインマンホール蓋集め」に付き合い、バンダイの工場見学と近隣の観光を目的に、静岡県静岡市へ行ってきました。今回のミッションは、マイカーで朝5時に出発。新東名高速を使い、渋滞もなく1時間30分かからず静岡市へ到着しました。まずは葵区と駿河区にある、ガンダムとザクのデザインマンホールを2枚ゲット!なぜ静岡市にガンダムのマンホールがあるのかというと、「ガンダムマンホールプロジェクト」の一環として設置されたものです。静岡市はプラモデルの出荷額が全国トップクラスで、「模型の世界首都」を目指した取り組みも行っているため、今後さらに増えるかもしれません。続いて、バンダイホビーセンターへ。9時受付開始、9時30分から工場見学です。「魅せる工場」をコンセプトにした施設で、ガンプラの製造工程などを見学しました。今どきのガンプラは、基本的に着色や接着剤が不要で、組み立てるだけでも完成度の高い仕上がりになります。友達によると、簡単なものなら慣れている人で5時間ほど、複雑で細かなものになると、さらに時間がかかるそうです。昔に比べてパーツも細分化され、手の関節など、動く部分が増えた分だけ組み立てるパーツも増えているのだとか。約90分の見学でしたが、楽しくて時間がたつのが早く感じました。プラモデルの材料となる樹脂についても、安定して入荷しているそうです。お昼は南マグロと本マグロが一緒になったマグロ丼。どちらのマグロもおいしく、大満足でした。午後からは国宝・久能山東照宮へ参拝し、博物館も見学。金の甲冑や太刀、西洋時計、眼鏡、鉛筆など、徳川家康ゆかりの品々を見ることができました。ここで少し驚いたのが日本平ロープウェイ。駐車場から上方向へ行くのではなく、山を下るようにして久能山東照宮へ向かいます。普段のロープウェイとは逆の感覚で、なんだか不思議な感じがしました。最後は天然温泉で疲れを癒やしてから帰路へ。マンホール、ガンプラ、マグロ、国宝、温泉と、朝から盛りだくさんの静岡旅。今回も友達の趣味に付き合っただけですが、気づけば自分もしっかり楽しんでいました。

これまでと、これから

森松(株)（企画営業部）S・Rさん



今年8月、40歳の誕生日を迎えました。普段は年齢を単なる数字くらいにしか感じていませんでしたが、39歳から40歳へ、いざ十の位が変わるとなると、思っていた以上に大きな節目のように感じます。そんな40歳の誕生日に、妻が滋賀旅を計画してくれました。宿泊先は滋賀県守山市にある「セトレ マリーナびわ湖」。琵琶湖のほとりに建つ全14室のホテルで、建築家・芦澤竜一氏による設計です。コンクリートの無機質な雰囲気の中に、滋賀県産の木材や土壁などの自然素材が取り入れられ、外壁には「ドイツ壁」と呼ばれる左官仕上げが使われています。表面の凹凸によってできる陰影も特徴的で、建物を見るだけでも楽しめました。そして宿泊した8月1日は、ちょうど「おごと温泉納涼花火大会」の開催日。ホテルから琵琶湖の対岸に打ち上がる花火を見ることができ、40歳最初の日としては、なかなか贅沢なスタートになりました。思い出に残る時間をつくってくれた妻に感謝です!思い返せば30代は、この会社に転職したことも含め、自分を取り巻く環境が大きく変わった10年間でした。仕事でも私生活でも、その時々で考えたり悩んだりすることもありましたが、その一つひとつが今の自分につながっているように思います。若い頃に想像していた40歳は、もっと落ち着いた「立派な大人」だった気がしますが、実際になってみると……思っていたほど変わっていません(笑)。これまでの経験を活かしつつ、新しいことへの興味も忘れずにいたいと思います。次に十の位が変わる50歳のとき、「40代もなかなか面白かった」と思えるよう、仕事もプライベートも楽しんでいきたいと思っています。



みんなを笑顔にする小さな家族

森松(株) (東京オフィス) K・Tさん



このたび、我が家に新しい家族が増えました。名前は「ポポ」、トイプードルの男の子です。我が家にとって初めてのペットということもあり、迎えることが決まったときは楽しい気持ちがある一方で、きちんとお世話ができるのか、しつけは上手にできるのかなど、少し不安な気持ちもありました。実際にポポとの生活が始まってみると、最初感じていた不安よりも、可愛さや楽しさのほうが大きく感じられるようになりました。家の中を元気いっぱい走り回ったり、おもちゃで楽しそうに遊んだり、眠くなるとそばに来て甘えてきたりする姿はとても可愛く、家族みんなが自然と笑顔になることが増えました。仕事や学校から帰宅したときに、嬉しそうに出迎えてくれる姿を見ると、疲れていても自然と嬉しい気持ちになります。もちろん、楽しいことばかりではありません。トイレのしつけや毎日の食事、遊び相手になることなど、実際に飼い始めてみると、思っていた以上に大変なこともあります。まだ子犬なので目を離せないことも多く、家の中を走り回っていると思ったら、いつの間にか別の場所で何かをしていることもあります。家族それぞれができることを分担しながら、みんなで協力してお世話をしています。また、ポポが家に来てからは、家族の会話も以前より増えたように感じます。「今日はこんなことをしていた」「こんなことができるようになった」など、ポポの様子を話すことも多くなりました。毎日の何気ない出来事の中にも、ポポがいることで楽しみが増え、家族にとって大切な存在になっています。初めてのペットとの生活は大変なこともありますが、それ以上に毎日たくさんの癒しや幸せをもらっています。これからもポポと一緒に過ごす時間を大切にしながら、家族の一員として愛情を持って育てていきたいと思います。



聖地・甲子園球場

森松産業 O・Nさん



この夏、息子たちが在籍する野球チームのOB選手を応援するため、2度甲子園へ行きました。1度目はチーム行事として、愛知代表の享栄高校の応援に行きました。6-2で負けてしまいましたが、アルプススタンドで迫力のあるブラスバンドの演奏と大観衆の声援に包まれながら、皆と一緒に応援できたことは貴重な経験となりました。2度目は息子たちと「プチ3人旅」という名目で、今大会大注目の準決勝、横浜高校 VS 智弁和歌山高校戦を観に行きました。昨年春の選抜決勝で熱戦を繰り広げた横浜高校と智弁和歌山高校。この時も現地で観戦しましたが、またこの2校の熱戦を観られる日が来るとは思いませんでした。どちらの高校にもOBが在籍していますが、今回は推し♡OBの「山田凜虎選手」(南区・大江中学出身)が所属する智弁和歌山高校を応援しました。試合は7-1で智弁和歌山高校が逆転勝ち。3回には山田凜虎選手の同点タイムリー二塁打、続く楠本龍生選手の今大会第7号となる勝ち越し3ランが飛び出しました。そして、甲子園ではなかなか観ることのできない確信歩きを間近で観られて、私も息子たちも大興奮でした。試合後、横浜高校の選手たちが涙を流し、泣き崩れる姿を見て、甲子園という大舞台へたどり着くまでに積み重ねてきた努力や、かけてきた思いの大きさを想像すると、胸がいっぱいになりました。真剣な表情で拍手を送る息子たちも、何か感じるものがあったのだと思います。野球少年が一度は夢見る甲子園。その舞台に立てること自体が、長く険しい努力の先にある奇跡のようなことなのだと感じました。息子たちも目標にしている舞台。いつかここに立てる日を信じて、一日一日の努力を大切に頑張っていきたいと思っています。週末は野球三昧で、親子で遠出する機会がなかったので、この「プチ3人旅」は最高の夏の思い出になりました。





ヒッチハイカーに乗せたことが、一度だけある。2005年、夏の終わり。24歳だった。そのころ僕は、不眠に悩まされていた。夜が更けても眠くならない。運動をしても、日が沈んでからのコーヒーを控えても効果はなかった。特段、深い悩みがあるわけでもない。「**何もないことが悩みだ**」と医者と言ったら、「**贅沢だね**」と笑われた。若く、体力が有り余っていた僕は、そのうち眠るのをあきらめ、毎晩のようにドライブに出かけるようになった。仕事を終え、帰宅してから深夜0時すぎに車に乗り込む。パワーのないトヨタのガイアで海沿いの国道を流したり、峠を登って夜景や夜空を眺めたり、海岸や堤防で波音や川のせせらぎを聞いたりして、朝まで時間をつぶす。そうして帰宅すると、少しだけ眠ることができた。当時、音域やレベルに合わせてグラフや模様が煌びやかに光るカーオーディオが流行っていた。音楽に反応して生き物のように光を放つ。スピーカーから流れる音楽に合わせて踊るだけの、実用性のない飾りのような光や模様が、僕の心に何らかの作用を及ぼしていたのかもしれない。ある日、地域のインターネット掲示板で、不思議な投稿を見つけた。20歳の女の子が、深夜1時のヒッチハイク相手を募集していたのだ。しかも、僕が真夜中のドライブに使っていた道だった。指定された場所は、有料自動車道のインターチェンジ近くにある、人通りの少ない町道のバス停。『となりのトトロ』でトトロが猫バスに乗っていった、あのバス停に似ていた。深夜1時では、トトロも現れないだろう。そういう場所だ。悪戯に違いない。けれど、投稿された粗い携帯写真が、かえて僕の想像力を刺激した。可愛いかもかもしれない。こんな子供じみた悪戯に引っ掛かるような馬鹿な奴らを笑いに行こう。そんな理由をこしらえて、僕はガイアで飛び出した。目的のバス停を通り過ぎる。誰もいない。ヒッチハイクガールも、トトロもいなかった。午前1時5分前。少し先に車を止め、窓を開けてエンジンを止めた。バックミラーを見ると、奥から人が近づいてくる。長い髪、白く細い腕。そのままバス停のベンチに腰をかけ、携帯電話をいじり始めた。朝までバスは来ない。怪しい。美人局かもしれない。そのまま立ち去ることもできた。だが、こんな山の中に女の子を置いていくのも……という紳士的な気持ち。いや、淡い期待が危機感に勝った。エンジンをかけ、バス停まで戻った。「**ネット掲示板で見かけたよ**」そう声をかけると、彼女は「**ありがとう。助かる**」と言って助手席に乗り込んできた。“かすみ”と名乗った。偽名だろう。県南部にある大きな町の駅前まで送ってほしいという。一時間くらいかかる。十分もすると、ガイアは沈黙で満たされた。僕はカーオーディオのボリュームを上げた。暗い車内に音楽が流れ、光の模様が躍った。「**仕事は?**」「**会社員**」「**どうして来たの?**」「**なんとなく気になったから**」「**明日は何しているの?**」「**会社に行く**」「**いいなあ。昼間にやることがあって**」昼間は何をしているのか訊ねると、少し間をおいて、「**寝てる。学校も仕事もない**」と答えた。なんか危ない匂いを感じた。「**ちゃんとしないと駄目だよ**」嫌われるのを覚悟で言うと、「**大丈夫だよ。こうやって助けに来てくれる人いるから**」そう言って、彼女は静かになった。赤信号で車が止まる。寝ているのかなと思い、助手席を見る。彼女は顔と体をこちらに向け、僕を見つめていた。カーオーディオから放たれる光が、彼女を淡く照らしていた。「**悪い人に騙されないようにね。まじめに生きなよ**」彼女の唇がそう動いた。赤いルージュの伝言。その夜、彼女と別れてから、僕はぐっすりと眠ることができた。翌日は、お国勤めの夢も希望もない生活に戻った。僕には面白くはないけれど、戻る場所があった。今でも、ときどき思う。彼女に戻る場所はあったのだろうか。戻る場所を見つけられただろうか。そして彼女を思い出すたびに、悪い男の運転する車にヒッチハイクするような、危ない夜が来ないようにと祈っている。目的地の駅のターミナルに車を止めると、彼女は「**ありがと。さよなら**」と言って降りた。車のデジタル時計は午前2時過ぎを示していた。一時間ちょっとのランデブー。お別れの言葉を言おうとしたとき、彼女の姿はすでになかった。その間、たった数秒。彼女は、魔法が解けたみたいに消えていた。ずいぶんと長い時間が経ってしまったけれど、ときどき僕はヒッチハイクガールのことを思い出す。ガイアも、音楽に合わせて煌びやかな光を放つカーオーディオも、ミニディスクも、今はもうない。彼女との真夜中のドライブも、現実のものだったのか自信がなくなってしまう。それでも、「**まじめに生きなよ**」と言った彼女の赤い唇の動きの生々しさが、今も僕をあの夜に引き戻すのだ。